第86回　鶴見大学図書館貴重書ミニ展示

文華荘厳

―祈りと悟り―

展示期間：

令和5年4月1日（土）～4月22日（土）

第 86 回　鶴見大学図書館貴重書ミニ展示　文華荘厳―祈りと悟り―

小さな展示へ、ようこそ

春爛漫、キャンパスは桜に包まれています。新入生のみなさん、そして新学期を迎えられる方々にも、歓迎の言葉を申したく存じます。どうぞ知の宝庫へおいでください。お待ちいたしております。

さて図書館には、音に聞こえた古典籍コレクションがあり、学科編成上、国文学・英文学・医学史等の書物群が筋の通ったものとなっています。また優秀な書誌学文献や古文書を収蔵し、教育と研究に役立てております。さらに、本学創立と深く関わる仏典にも、きわめて価値の高い重要文献を数えることができます。この展示では、世界最古の印刷物の一つ百万塔陀羅尼から道元禅師自筆道正庵切まで、まことに小規模の催しですが、かけがえのない貴重資料ばかりをお目に掛けます。

一字一字心を込め、ひたすら真理を求める営みが、壮麗な経典となって伝えられました。「なんだ、抹香臭い」と仰らずに、その料紙その筆跡、あるいは装丁や表具を鑑賞してください。大聖武の力感溢れる様式やいかにも厳しく鋭い道正庵切の書風が、時代を超えてあなたに語りかけるでしょう。

令和５年４月　　鶴見大学図書館

展示書目

１）百万塔（付　自心印陀羅尼１巻）　神護景雲４年（７７０）以前制作　１基

２）大般若経　巻１７６～１８０　永恩具経（横浜市指定文化財）　奈良時代写　５巻

３）大般若経　巻１９０断簡（法隆寺虫食経）　神護景雲元年（７６７）行信発願　１紙

４）賢愚経　巻９　善事太子入海品　伝聖武天皇筆　大聖武　奈良時代写　額装１面

５）金銀交書経　不空羂索神変真言経　巻２８　２８行　平安時代後期写　１幅

６）対大己五夏闍梨法　道元禅師自筆　道正庵切　寛元２年（１２４４）写　額装１面

解題

１）百万塔（付　自心印陀羅尼１巻）　神護景雲４年（７７０）以前制作　１基

世界最古の印刷物と高く評価されてきた奈良時代文化の記念碑的遺産。近年仏国寺（韓国）にて発見された『無垢浄光大陀羅尼経』が８世紀前半の制作と言われる通りならば―異説もある―、百万塔に先行する。しかし伝来経路が明確であり、歴史文献による検証もなしうる点で、やはり時期の特定できる最古の印刷物としての価値は揺るがないであろう。塔中に陀羅尼を納めるのは、「各以一本置塔中而供養」によって招福除災後世安穏を実現する『無垢浄光大陀羅尼経』の所説に従ったもの。『無垢浄光大陀羅尼経』には６種の陀羅尼を記すが、その内、根本・相輪・自心印・六度の４種を選んだ理由は未勘。なお経中に「六度」の語は見当たらない。

史料『続日本紀』宝亀元年（神護景雲４年、７７０）４月１０日条「八年乱平、乃発弘願、令造三重小塔一百万基、高各四寸八分、基径三寸五分、露盤之下、各置根本・慈心・相輪・六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺、賜供事官人已下仕丁一百五十人爵、各有差」がその文証。現存する実物とよく符合する。「八年乱」とは天平宝字８年（７６４）９月に起こった藤原仲麻呂の乱であり、鎮定後の平安を期して造塔が企てられた。小塔の外に一万基・十万基の塔も作られたが、法隆寺伝来の塔以外は全て散逸した。使用料紙・紙の加工法・印刷技術（木版か銅版か、摺刷か押捺か）・版種等、問題点は多数あり、議論が盛んに行われている。以下は、実見目視の結果を私見として記すものである。

〔百万塔〕

イ　塔身部

檜を轆轤挽きした３層塔（高さ１３・１糎、底面径１０・４糎）は白泥化粧がかなりよく残る。全体として保存状態は良好、第１層・第３層の小破損が惜しまれる。塔上面中央に円孔（径２・２糎、深さ約７糎）を穿ち、陀羅尼の収納と相輪固定の機能を持たせる。底面に墨書あるも、薄れて判読不能。制作年月日か担当者の名前かが記されていたであろう。

ロ　相輪部

桜と覚しき緻密な材（最大径３・５糎、高さ８・２糎）を挽き、白土化粧を施す。各部分をどのように把握し名付けるかは難しいが、一応、露盤・伏鉢・宝輪（大小７層）・宝珠と見ておく。各部分を成形する技術は高度である。塔身部と同じく底面に墨書、これも不能読。

〔陀羅尼〕

厚手楮紙を黄蘗染めした本紙（縦５・５、横３９・６糎）の巻出し部に、簾目の強い楮紙（縦５・５、横６・１糎）を巻首に糊付けするのは、表紙の意味。尾部若干を細かく巻き軸の機能を持たせるのも、細小にして簡略とは言え、仏典として巻子本の体裁を整えるためである。表紙にわずかの虫損あり。『無垢浄光大陀羅尼経』（内題は「無垢浄光経」）自心印陀羅尼３１行（短版）を刷る。４種９版いずれも１行５字。書風は一見素朴ながら、力のある筆致と個性的な結構は、極めて味わい深い。

洗練された写経体が内典のみならず漢籍・簿冊にまで使われていた時代に、なぜ奇古簡勁の文字を版下として選んだか。追求すべき課題の一つである。

〔付属資料〕
イ　印籠蓋木箱（縦横１５・０、高さ２４・３糎）１個。蓋面に「百萬塔之一」の墨書、底面に「鵤寺倉印」の朱印あり。
ロ　明治４１年（１９０８）６月法隆寺発行の百万塔贈呈証書１枚。

２）大般若経　巻１７６～１８０　永恩具経（横浜市指定文化財）　奈良時代写　５巻

新補の栗皮色無地紙表紙（縦２５・３、横１１７・５糎）に濃紫の平紐を付す。外題なし。撥形紫檀軸も新補。本文は打ち紙加工を施した黄蘗染め楮紙（左右約４８糎）に淡墨界（天地１９・７糎、界間１・８糎）を引き、１行１７字の定式に書写。いずれも奈良時代特有の秀勁卓抜な写経体である。全体に書風の共通性が高く、筆跡の同異を判じがたい。巻１７６と巻１８０は別筆か。朱点あり。虫損は本文と類似の紙を用いて補修済み。法量は、７８２・３糎（巻１７６）、８８７・４糎（巻１７７）、８８４・１糎（巻１７８）、９３９・３糎（巻１７９）、８４１・７糎（巻１８０）であり、５巻連続して伝存するところ、極めて貴重。元来巻子本として調製されたが、使用の便を考えたゆえか、一時期毎半葉５行の折本に改装。現在は原態に復している。以下、主として田中塊堂『日本古写経綜鑑』に従って示すと、僚巻には「天平二歳庚午三月上旬（中略）都菩臣足島」（巻５１８）・「天平二年歳次庚午三月上旬（中略）黄君満侶奉」（巻５２２）・「天平十三年五月廿四日橘戸祢麻呂願経」（巻５７３・５７７）等、年紀の判明する奥書を持つものがあり、興福寺の蔵司永恩（１１６７～？）によって天平初年から平安時代初期に及ぶ大般若経の収集がなされたのである。掲出の５巻は奈良時代後半の書写であろう。永恩は１具となったこの経を氏神たる河内国玉祖神社に奉納するが、伝来の過程で徐々に流出、明治の神仏分離令によって散逸は決定的となった。

巻１７６より巻１７９まで、巻末に「句切了　永恩」の簡略な加点奥書が見え、巻１８０はやや詳しく「天福元年癸巳五月廿五日上偕（階？）馬道以東／為第二房句切了　永恩生年六十七」とする。天福元年（１２３３）５月の年紀は貴重。１０巻毎に長めの奥書を記すのが原則であったと推される。本文中の句点より奥書の朱色はやや薄く、難読の箇所がある。「上階馬道以東為第二房」については、京都立本寺蔵法華経巻１（藍紙、重文）奥書中の類似文言「於興福寺上階馬道以西第十六大房」が今後の詮索に資するであろう。

貞永２年（１２３３）永恩の奥書を持つ巻５９１の存在が報告されており、巻の順に従わない加点であった。この奥書は諸巻中最も早い加点時期を示す。不学にして永恩の伝を明らかにしえないが、ほぼ同時代に高野山にも僧永恩を見る。貞応２年７月１０日春日社廻廊石壇石支配注文の「永恩房　奉　同（＝西南院）」は、あるいは話題の人物に該当するか。あたかもこの年、現在知られる最も早い加点が行われた。横浜市指定有形文化財（平成５年）。

３）大般若経　巻１９０断簡（法隆寺虫食経）　神護景雲元年（７６７）行信発願　１紙

黄蘗染め楮の打ち紙（縦２６・０、横７・８糎）に淡墨界（天地２０・３糎、界幅１・８糎）４行 、瑩紙加工を施した料紙を用いる。行信（？～７５０？）発願により始まり、その没後弟子孝仁が事業を継続した写経の断簡。法華経・華厳経・大般若経・瑜伽師地論など２７００巻が書写され、経巻は法隆寺に納まった。行信は『法隆寺縁起資財帳』別本に「法師行信覓求奉納」と見え、聖徳太子自筆とされる法華義疏を献じた人物。巻末願文の「大法師諱行信、平生之日至心発願・・・弟子孝仁等不勝風樹之傷、敬弁先願・・・神護景雲元年九月五日敬奉写竟」から、写経の経緯と完成年時が判明する。

古い仏書は多く虫損を蒙っているが、特に神護景雲発願経を虫食い経と呼んで称揚しているのは、行信の業績もさることながら、法隆寺伝来の筋のよさと、文字の整斉端麗に魅了されるからであろう。なお虫損は概ね後代の補修に起因する。すなわち補修時に使用された糊を虫（シバンムシ）が好んだ結果である。

書風は謹厳な写経体にして優美さも兼ね備えており、極め札様の小紙片に「法隆寺虫喰経　天平時代写　行信僧都発願経」と記される。これは、古写経に詳しかった京都芸林荘先代の手。今のところ法隆寺伝来か否かの確証はないが、芸林荘先代の鑑識眼をひとまず信用しておく。書風・資質・書写様式は疑いなく奈良時代のものである。

４）賢愚経　巻９　善事太子入海品　伝聖武天皇筆　大聖武　奈良時代写　額装１面

香抹を漉き込んだと言われる具引き装飾料紙、いわゆる茶毘紙（縦２７・４、横７・９糎）３行。淡墨界（天地２３・２糎、界幅２・６糎）を施す。料紙中の粉末状物質はかつて仏舎利と見なされており、「茶毘紙」の名称はこれによる。最近では、マユミの靱皮を用いて漉いた時に生じる樹脂の凝固体か、とも説かれる。『賢愚経』巻９善事太子入海品第３７を１行１２字に書写。写経は１行１７字を定式とするが、その雄渾重厚の大字写経体により１行１２字となった。惜しいことに墨の流れと数カ所の虫損とが見られ、１行目の欠字は「喪父」である。『賢愚経』は、１３巻・１５巻・１６巻・１７巻と幾種類かの伝本があり、掲出断簡は１７巻本。

「大聖武」と呼ばれるこの断簡は、奈良時代写経中屈指の名品として、また良質の古筆手鑑巻頭には必ず押される名物切として、高く評価されてきた。『新撰古筆名葉集』聖武天皇の項に「大和切　大字カラ紙胡粉地経、墨卦墨字、大聖武ト云、紙白・浅黄・茶・ウス紅等アリ」と著録されて名高いが、古筆愛好熱が高まる安土桃山時代以前から重んじられ、したがって分割も早い。「英海送書状、聖武天皇宸翰三行（夾注「賢愚経文云々」）」（『実隆公記』永正６年６月２６日）はその最古の記録であろう（永正６年＝１５０９）。前田尊経閣本奥書によれば、東大寺戒壇院に蔵されていた。

文字にかなり多くの補筆が見られることが指摘されており、掲出断簡でも「父」（１行目）・「子」「汝」（２行目）・「不」「知」（３行目）等に、それらしき墨の濃淡を看取しうる。しかし墨の流れ方・光沢から判断しても、書写の時代から推しても、大聖武は明らかに松煙墨を用いており、松煙墨が堅めの料紙に乗った場合、墨量の多寡によって濃淡が強調され―料紙が白い時には特に―、補筆のごとく観察され

ることにも、配慮する必要がある。料紙の明るく白い場合と相当程度強い色調の場合との文字の見え方を比較するためには、２種の料紙を併置するものが適しており、白鶴美術館蔵手鑑巻頭はその好例。ともあれ「補筆」と言われる箇所の再検討が望ましい。

５）金銀交書経　不空羂索神変真言経　巻２８　２８行　平安時代後期写　１幅

光沢ある紺紙（縦２５・６、横５０・２糎）に銀界（天地１９・３糎、界幅１・７糎）を引き、金銀泥にて交互に『不空羂索神変真言経』巻２８（全３０巻）清浄蓮華明王品第６７を写す。種々の悩乱を香薬と加持とによって治す方法が記される部分である。１４行目以下に石榴を用いた歯痛治癒法が述べてあるのはおもしろい。全２８行、１行１７字は写経の定式。料紙は楮の打紙に瑩紙加工を施しており、銀界・銀字にやや薄れが見られるものの、金泥は燦然と鮮やかである。

二重箱入り、内箱の墨書「紺帋金銀交書経中尊寺一切経断簡」（蓋表）・「浪華法眼塊堂〔英〕」（蓋裏）は、古写経研究者・書家として名高い田中塊堂（１８９６～１９７６）の手になる。中尊寺経は奥州藤原氏初代清衡の金銀交書一切経・基衡の金字千部法華経・秀衡の金字一切経の総称、いずれも紺紙である。特に清衡のものを指して言い、田中塊堂の鑑定も、掲出断簡が金銀交書であるところによるものであろう。確かに金銀交書経は極めて稀少ではあるが、しかし奈良時代以来いくつかの作例を見るので、金銀交書の特徴のみでは中尊寺経と断定しがたい。書風・料紙等から平安時代後期の贅沢な写経と推されるものの、中尊寺経とは別と考えるのが穏当か。

本文は大正新修大蔵経所収の『不空羂索神変真言経』と文字の異同がある。「和蘇加持」（掲出断簡）⇔「和酥加持」（大正蔵経）、「後温塗頭」（掲出断簡）⇔「微温塗頭」（大正蔵経）、「加持一百遍」（掲出断簡）⇔「加持一七遍」（大正蔵経）などの他、一層注目すべきは、最終行が「□除散若有龍湫辺作一火」までで書きさしとなり、以下６字分余白となっていること。期待される文言は「樒木然火以酥蜜酪白芥子」であり、「若有龍湫辺作一火」は前行「除散若有龍湫辺作一火壇」の下線部と重なるので、目移りによる誤写を生じ、中途で止めたと思われる。すると、掲出断簡は成巻に至らなかった反故の１紙が伝存したものではなかろうか。

天地は青磁色素絹、中廻しに金茶地菊と牡丹の金襴を用い、萌黄地金襴の風帯と一文字、軸は銅魚子花文打ち出し。本紙・表具共に豪華で見応えがある。

６）対大己五夏闍梨法　道元禅師自筆　道正庵切　寛元２年（１２４４）写　額装１面

道元禅師（１２００～１２５３）撰『永平大清規』の内。『対大己五夏闍梨法』は、先輩僧侶（大己）に対する礼法を６２条にわたって定める。掲出断簡は第２５～２８条を書写した１面分であり、『藻塩草』（国宝手鑑、京博）に押された１葉の裏面。斐紙と言われているが、丁寧に打ち紙加工を施した楮紙（縦２３・９、横１４・４糎）であろう。白界６行（天地１８・０、界幅１・８糎）の粘葉装。全体は１０丁２０面程度か。料紙・白界・謹直な筆運び等から判断して、清書本と思われる。本学図書館には、掲出断簡の他に第６０～６２条の１葉、計２葉を蔵する。「道正庵切」は

『増補古筆名葉集』道元禅師の項に「道正庵切　四半白紙白卦正法眼蔵片カナ交リノ処モアリ」と記載され、後述の『見ぬ世の友』（国宝手鑑）にもその名が見える。『正法眼蔵』は誤認であるが、数少ない禅師の自筆資料として重要。「道正庵切」は禅師と共に入宋の藤原隆英（？～１２４８・７・２４）号道正が帰国後営んだ洛西木下の庵に由来する。『洞上聯燈録』巻１２拾遺の伝えるところでは、父藤原顕盛・母源仲家女、清水谷公定の養子。貞応２年（１２２３）渡宋。禅師が病んだ時、「神仙解毒方」を神人より授けられ、代々その薬方を伝える。「擢左金吾、叙三品」や「吾是日国稲荷廟神」から薬を受けたなどの記述は信を起きがたいけれども、西洞院に「道正の町、道正の解毒丸は天下にかくれなき名薬なり、洞家の僧のつたへしとにや、子細は諸人の口につたはれり、今も禅僧の此家に入来るといふ」（『京童』第３）・「○解毒丸　上の京木の下　道正庵法眼製」（『花洛羽津根』３）と著聞し、現在もその呼称が地名として残っている。掲出断簡もしくは典籍形態の『対大己五夏闍梨法』は、旧家であり富裕でもあったらしい道正子孫に有縁の資料か。

巻末奥書部分が『見ぬ世の友』に収められ、「于時日本寛元二年甲辰三月二十一日在越宇吉峯精舎示衆　道元〔花押〕」の文言によって寛元２年（１２４４）晩春の成立と判明。左端糊代部分に「第二」の文字が残り、この断簡が丁の裏面であることを証する。「第二」は丁付けではなく編目の順序を示し、その意味は小さくない。禅林の規律を定めた『永平大清規』は寛文７年（１６６７）版本が流布しており、所収篇目は『典座教訓』（嘉禎３年、１２３７）・『弁道法』（寛元３年、１２４５成立か）・『赴粥飯法』（寛元４年、１２４６以降）『吉祥山永平寺衆寮箴規』（宝治３年、１２４９）・『対大己五夏闍梨法』（寛元２年、１２４４）・『日本国越前永平寺知事清規』（寛元４年、）である。この配列となる必然性が宗門においては存するのであろうけれども、それを素人が窺知することは難しい。ここで仮に６篇の著作を成立年代順とすると、『対大己五夏闍梨法』はまさしく「第二」に相当し、従って禅師は自らの著を述作の順に並べ清書したと推測されるのである。流布本の意義は勿論大きい。しかし自筆原本の語るところ、わずか２文字と雖もかけがえのない価値を持つ。なお、模写あるいは偽作も存するので、要注意。